

研究ノート

陝西省・甘肅省・ウイグル自治区の観光における博物館活用の研究  
—中国陝西省・河南省・河北省における博物館の現状と観光活用—

落合知子, 中島金太郎\*

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科、\*連絡対応著者)

Research on the Utilization of Museums in Tourism  
at Shaanxi, Gansu, Uighur Autonomous Region  
—Current Situation and Tourism Utilization of Museums  
in Shaanxi, Henan, Hebei Province—

Tomoko OCHIAI and Kintaro NAKAJIMA\*

(Department of International Tourism, Faculty of Human and Social Studies,  
Nagasaki International University, \*Corresponding author)

Abstract

This paper features a discussion based on the results of a survey of museums, ruins, historical sites, world heritage sites, old towns, etc. in Northwestern China conducted in 2018 as an aspect of joint research with the Department of International Tourism at Nagasaki International University. This year's survey was focused on Shaanxi, Henan and Hebei including the province's museums, ruins, world heritage sites, and others. Utilization of museums in the field of tourism as well as Chinese policies to promote tourism are analyzed. Museums in China have developed rapidly in recent years, and their display technologies and architecture now far surpass those used in Japan. The purpose of this paper is to clarify trends in how museums are utilized in the field of tourism in China as well as trends in attitudes toward tourism by surveying changes in Chinese museums and townscapes. In addition, the Uyghur area survey planned was interrupted by a temporary riot, therefore the survey site was changed to Henan and Hebei Province from the viewpoint of security.

Key words

Museum, University Museum, World heritage, Tourism utilization, Multilingualization

要旨

本研究は、平成30年度に採択された長崎国際大学国際観光学科共同研究の一環として実施した、中国西北域の博物館、遺跡、史跡、世界遺産などの調査結果に基づく論考である。本年度は陝西省西安市及び河南省・河北省に焦点を絞り、当該地域の博物館、大学博物館、遺跡、世界遺産などを調査し、中国における博物館の観光活用とその対策についての分析を行った。中国の博物館は近年急速に発展を遂げており、映像展示技術や諸建築物をはじめとして日本の博物館を凌駕する点多々見られる。それと同時に中国の観光整備も進み、観光客に対して過ごしやすい環境が整い、地元住民の意識も変化してきたと言える。このようなことから、中国における博物館の観光活用と観光に対する意識の動向を明らかにすることを目的とする。なお、当所予定していたウイグル地区の調査については、一時暴動が発生し治安上の観点から、調査地を河南省と河北省に変更したものである。

キーワード

博物館、大学博物館、世界遺産、観光活用、多言語対応

## はじめに

陝西省西安市は唐代における長安の都で、周辺の数国から訪れる使節団やシルクロードの終着点としてモノと人が交差するポイントであったことから、多くの遺跡が残る地域である。世界遺産に登録されている秦始皇帝兵馬俑博物館は、遺跡そのものが集客力を持つゆえに実物資料を公開するだけで世界からの集客が可能であるが、現在は観光客への環境整備が急速に進んでいる。このように、陝西省政府による遺跡の保存とその活用のあり方が以前と大きく変化し、城内をはじめとする西安市全体がきれいに整備され、近代化に向かっているのが現状である。

一方、河南省安陽市に所在する殷墟は商の時代における都の遺跡で、遺跡を現地保存する殷墟博物館は、遺跡周辺の景観にも配慮した保護対策を実践する野外博物館である。交通の便が悪いこともあるが、同じ世界遺産でありながら集客力が高いとは言えない。同じ中国でも遺跡保存のあり方は千差万別であり、省ごとに保護政策は異なっているのが現状である。

また、河北省石家荘市の観光産業も拡大されており、観光収入も増加傾向にある。石家荘市は華北地域の交通拠点であるため、交通が便利であり、北京と天津からの観光客も期待されている。

本稿は中華人民共和国の陝西省西安市と河南省安陽市、河北省石家荘市の博物館、遺跡、史跡、世界遺産等の現地調査を踏まえて、中国における博物館および文化遺産の現状と観光活用の課題について考察するものである。

## 第1章 調査概要

### 1. 調査行程

本調査は6泊7日の行程で、8月28日(木)に東京羽田空港から北京経由で西安空港に調査入りした。翌29日(金)は、秦始皇帝兵馬俑博物館、西安半坡博物館、青龍寺を調査した。30日(土)は陝西歴史博物館、西安博物院、西安碑林博物館の調査を行った。31日(日)は河南省安陽市に移動し、

世界遺産に登録されている殷墟を調査した後、河北省石家荘市に移動した。9月1日(月)は河北博物院、河北地質大学地球科学博物館、同銭円金融博物館、永昌博物館を調査した。その後、複数の民営博物館が入居している世界湾収蔵博物館集群を調査した。2日(火)は、石家荘市の北方に所在する曲陽県を訪問し、曲陽石道芸術館と修復工房を調査した後、北京市に移動した。3日(水)、北京空港から東京羽田空港に帰国して全行程が終了した。

## 2. 調査地域の概要

### (1) 陝西省西安市の概要

3000年以上の都市文化を有する世界4大古都のひとつ西安は、中国の政治・経済・文化の中心として栄えてきた。特に唐代における西安(長安)は人口100万人の国際都市であり、東西の貿易、文化交流の道シルクロードの起点としてその繁栄を極めた。現在は陝西省の省都で、人口1,220万人余りを擁し、東西の長さ約204km、南北約116km、都市面積はおおよそ9,983km<sup>2</sup>、市街地は1,066km<sup>2</sup>を擁する西北地区最大の都市であり、中国政府から「西部大開発」の拠点都市に位置付けられている。また、西安文物局HPによると、西安市には漢長安城、唐長安城の遺跡など国家級文化遺産が41ヶ所、省級文化遺産が65ヶ所、市県級文化遺産が176ヶ所あり、政府が登録する文化遺産は2,944ヶ所存在する<sup>1)</sup>。中でも大雁塔や小雁塔などは、2014年に「シルクロード：長安—天山廊の交易路網」の構成資産の一つとして世界遺産に登録され、世界中から多くの観光客を集めている。

### (2) 河南省安陽市の概要

河南省は黄河中下流に位置する地域で、総面積167,000km<sup>2</sup>、人口9,402万人を数える<sup>2)</sup>。夏から金の時代にかけて20もの王朝が都を構え、中でも安陽や洛陽、開封は中国史上特に著名な都として繁栄した歴史を有している。今回調査した殷墟が所在する安陽市は、北京の南方約500km、河南省の最北部に位置する(地球の歩き方編集

[2018:136])。中国七大古都の一つとして知られ、文字に記された中国最初の都とされている。また、魏、後趙、前燕、東魏、北斉の都としても使用され、市域全域に古代の史跡が確認できる。

### (3) 河北省石家荘市の概要

河北省は、北京に隣接する河北平原の北部に広がる中華民族発祥地の一つで、総面積187,700km<sup>2</sup>、人口7,185万人で漢族が96%を占める。省都は石家荘市で、河北の省名は黄河の北にあることに由来している。石家荘市は殷周時代から栄えた都市で、戦国時代(紀元前403～221年)には燕国や趙国の要衝として重要な地点とされていた(地球の歩き方編集 [2018:68])。省内には、万里の長城や承徳の避暑山荘、清朝の帝陵といった世界遺産が所在し、また易県の燕下都、中山王陵、趙の都「邯鄲」に代表される遺跡が数多く所在する地域である(杉本 [2015:27-40])。

本年度調査した地域は、いずれもが古くから人類が栄え、かつて都がおかれたことでも知られる。また、シルクロードおよび黄河を通じて人や物資の交流がなされており、昨年度調査した甘肅省蘭州市および天水市とも深い関係があった地域でもある。豊富に文化資源が遺存していること、および昨年度調査地との比較検討が可能であることから、当該地域を調査対象として選定した。

## 第2章 陝西省・河北省下における博物館、文化遺産

本章では、今回の調査で訪問した博物館および文化遺産の概要と現状を記し、実態把握を行った。また当該地域の博物館は、収蔵資料や運営形態に特徴があるものが多いものの、便宜上日本の博物館分類に沿って分類し、各項目においてその特徴を論述する。

### 1. 歴史博物館

当該地域の歴史博物館としては、陝西歴史博物館、西安博物院、河北博物院、青龍寺の博物

館施設が挙げられる。

陝西歴史博物館は、陝西省下で発見された文物の収蔵・展示を目的に、1991年に開館した歴史博物館である。2008年に国家一級博物館、2009年に国家級重点博物館に指定され、中国の観光地等級4Aを獲得するなど、国家レベルでの質保証がなされている<sup>3)</sup>。同館には171万点の資料が収蔵され、先史時代から現代に至る陝西省の歴史の通史展示である「陝西古代文明」を基本展示とし、3千点を超える資料を常設展示している。展示は、陝西省下で発見・伝世した考古・歴史資料が中心で、豊富な実物資料を提示するだけでなく、図や写真を多用した平易な理解を促す展示が心がけられており、中国の博物館に多い傾向にある映像展示は逆に少ない印象を受けた。展示以外には、ボランティアによる解説を受付けるブース、音声ガイドの貸し出し所、食堂、ミュージアムショップといった施設を有し、博物館としてオーソドックスな構成となっている。

一方、同館の特徴は入館システムである。同館は、無料館として運営されているが、入館するためにはスマートフォンを使用して入館受付をする必要がある(写真1)。まず、入口で二次元コードを読み取り、身分証やパスポートの



写真1 陝西歴史博物館の入館システム

データを入力したうえで、入館したい時間帯を設定して入館予約をする。そして、事前に予約した時間帯に入口に行くと、手荷物検査を受けたうえで入館できるのである。これは、無料館であるため、見学目的以外の来館者が館内に溜まることの防止や、来館者の分散を目的としていると考えられるが、外国人対応の面では難がある。実際、筆者は通訳とともに来館したため、現地で手続きを踏むことで見学できたが、何も知らない外国人観光客は入館できないであろう。ましてや同館の受付には、多言語による解説は無く、語学力に乏しい外国人には入館が難しいシステムである。

西安博物院は、西安市雁塔区に所在する歴史博物館である。2007年に開館し、2010年には無料開放化を実現した<sup>1)</sup>。同院は、旧荐福寺境内を敷地とし、旧荐福寺の構築物である小雁塔および各種仏閣と新設された博物館を内包しており、基本的な資料展示を行う博物館と野外部によって構成される野外博物館の要素を含むことが特徴である。

博物館部門は通史展示を基幹とし、そのほかに仏像、玉、青銅器、陶磁器といったテーマごとに資料を収蔵・展示しているのが特徴である。収蔵資料は11万点余りであり、陝西歴史博物館に比べて少ないものの、テーマ展示によって観覧したい資料を効率的に見られることが利点である。

西安博物院に含まれる小雁塔は、長安城内に設けられた旧荐福寺の境内に所在する仏塔で、市域に所在する大雁塔や長安城大明宮とともに「シルクロード：長安～天山回廊の交易路網」の構成資産として世界遺産に登録されている。小雁塔には展示が無いようであり<sup>2)</sup>、同じく旧荐福寺の建築である大雄宝殿と藏経楼にそれぞれ展示が見られる。

大雄宝殿では、「シルクロードの宝石小雁塔」(筆者意識)と銘打ち、建立された8世紀から現在までの小雁塔の推移について紹介している。中央にハイケース2つ、東西両壁面に壁ケース

をそれぞれ設置し、石造物と書籍を展示しているほか、壁面を取り囲むように小雁塔の歴史の変遷を記したパネルが配置されている。

一方、藏経楼の展示は「荐福寺・小雁塔歴史展」と銘打ち、歴史上の長安における荐福寺と小雁塔について紹介している。ここでは、石灯籠あるいは柱の基礎部分などの石造物を少数露出展示し、また荐福寺に所在した石碑の拓本を展示している。展示の大半は図や写真を多用したパネル展示で、大雄宝殿と比較して荐福寺に比重を置いた展示構成となっている。

河北博物院は、河北省下の文物を収蔵・展示する歴史博物館である。前身は1968年竣工の河北省博物館で、2013年に南区を建設し、従来存在した区画を北区と位置付けて、この両者をもって河北博物院としている<sup>3)</sup>。

基本展示は「石器時代の河北」「慷慨悲歌—燕越故事」「抗日烽火—英雄河北」といった9部門に区分され、収蔵資料24万点中5千点余りの資料が常時展示されている。これに加え、芸術、自然、科学技術、民俗など、常設テーマ以外の内容の特別展を毎年実施しており、筆者が調査した際にはマンモスに関する特別展など3件が実施されていた。

同館の取り組みとして、教育普及活動に力を入れていることが挙げられる。同館は、教育普及活動を年間320回程度開催し、中でも毎週日曜日の9:30~11:30に実施している講演会は、2014年の開館から2019年9月初頭の間に275回開催している<sup>4)</sup>。また、夏休みなどの長期休暇期間には、博物院が企画する河北省下の博物館見学ツアーを実施している。これは、河北省在住の人々に博物館や地域の歴史について広く知ってもらうことを目的としたもので、とりもなおさず“地域”を意識した博物館活動の実践館として特徴的である。

青龍寺は、西安城の南方、雁塔区に位置する古刹である。遣唐使として中国に渡った弘法大師空海が密教の修行をした寺院として著名で、日本における密教発展の大本となったとの意味

から、現在では四国八十八霊場の0番札所として認定されている<sup>8)</sup>。

青龍寺陳列室は、青龍寺敷地の南東に位置する正果堂に近接した展示施設である。室内には、空海を通じた青龍寺と日本（特に四国）の関係を表す資料と、寺域の発掘調査で得られた考古資料が展示されている。特に前者は、主に四国から青龍寺を訪問した人々が奉納した写経、絵図、史料および空海に関する日本語の文献類が収蔵・展示されている。先述の通り、青龍寺と四国は空海を通じた縁があり、国交正常化以降、相互に交流してきた歴史を有しており、同室は日中交流の成果を示す場として機能している。しかし、各資料は緋毛氈を敷いただけの古いガラスケースに提示しており、書籍は背表紙を表にして本棚に入れたままで、そこには観覧者に資料を見せて理解してもらいたいといった展示意識は無い（写真2）。

青龍寺のほぼ中央に位置する青龍寺遺址博物館は、青龍寺跡から出土した遺物と日中文化交流に関する歴史・美術資料を展示する博物館で、2012年5月に開館した<sup>9)</sup>。3階建ての館内は、1階に唐時代の青龍寺の出土資料、2階に空海に関する歴史、3階に空海の時代である隋・唐時代の文物の展示をそれぞれ設けている。また2階の展示では、空海を通じた日本の紹介として、真言宗系の大学である種智院大学の紹介や、空海が中国から持ち帰ったのが起源とされる讃岐うどんの展示など、奇をてらった展示がなさ



写真2 青龍寺陳列室の展示

れている点が興味深い。

## 2. 遺跡博物館

当該地域の遺跡博物館としては、秦始皇帝兵馬俑博物館、西安半坡博物館、殷墟（殷墟博物館）が挙げられる。

1987年に登録された世界遺産「秦の始皇帝陵と兵馬俑坑」は、西安市臨潼区に所在する面積56.25km<sup>2</sup>の始皇帝陵と、その東1.5kmに所在する始皇帝陵の陪葬墓である兵馬俑坑から構成される陵墓遺跡である。3ヶ所の兵馬俑坑からは陶俑陶馬8千余点、青銅器4万余点が出土している（中国駐大阪観光代表処 [2018:5]）。現在は、当該遺跡の保存・活用を目的とし、秦始皇帝兵馬俑博物館と秦始皇帝陵の2施設からなる遺跡博物館「秦始皇帝陵博物院」として運営されている<sup>10)</sup>。

秦始皇帝兵馬俑博物館は、兵馬俑坑の保存とそこから出土した資料展示を目的とした博物館施設である。同館は、主要展示施設である陳列庁と3ヶ所の兵馬俑坑を主とし、それにミュージアムショップなどの小施設が付属する形で運営されている。陳列庁は、兵馬俑坑から出土した資料の収蔵・展示を目的とした施設であると同時に、世界遺産のガイダンス機能を持つコア施設としても機能している。兵馬俑坑は、発掘調査で出土した遺構面に覆いを掛けて出土状態を観覧できるようにした「覆屋展示」の手法を採用している。1号坑は、東西200m、南北60mに兵馬俑が整然と保存された遺構であり、一般的に兵馬俑坑といえば1号坑と認識されることが多い（写真3）。これに加え、やや小規模な2号・3号坑が品の字状に配置されている。また、1号坑内には兵馬俑専用の修復工房が設けられ、出土した兵馬俑の記録作成や保存・修復作業を担っているほか、3号坑には展示ケースが設えられて、一般的な博物館と同様の資料展示を行っている。

半坡遺跡は、1953年に西安市郊外の半坡村で偶然発見され、発掘調査の結果紀元前4800～4300

年頃の新石器時代の遺跡であり、中国最古の農耕遺跡であることが判明した<sup>11)</sup>。西安半坡博物館は、半坡遺跡の現地保存とその出土資料の展示を目的として、1958年設置された中国初の遺跡博物館である。博物館は、資料を展示する「基本陳列展厅」、企画展を開催する「補助陳列展厅」、遺跡保存区画などから構成されている。基本陳列展厅は、「半坡遺跡の出土文物展」と題し、半坡遺跡の概要、当該地域に暮らした人々のくらし、使用した道具、土器に描かれた文様などのテーマで展示を構成している。展示室の末尾には、「謎」と大きく漢字が書かれた区画があり、半坡文字、人面魚紋、尖底土器など、未だ解明されていない半坡遺跡の謎について問題提起を行い、現在の学説を列挙する形で展示を締めくくっている点が興味深い。また遺跡保存区画は、兵馬俑坑と同じく覆屋展示に出土資料の展示を組み合わせた方式を採用している。

西安半坡博物館は、遺構保存区画に隣接して「史前工場」と称される区域を設け、主に子どもを対象とした教育普及活動を展開している(写真4)。同館の教育普及活動は、半坡遺跡の時代を体験することをコンセプトとし、土器の彩色、建物建築、火おこし、尖底土器での水汲み、昔の衣装の着装といった体験プログラムを用意している<sup>12)</sup>。体験活動は30名以上としているが、これは学校あるいは地域コミュニティ単位での体験利用を想定していると考えられ、館内に掲示された写真を見る限り小学生程度を対

象とした活動と判断される。

殷墟とは、安陽市の北西にある小屯村一帯に所在する中国殷代後期の宮殿および陵墓を含む都城遺跡である(中国駐大阪観光代表処 [2018: 24])。1928年の発掘調査開始から60年弱の間調査が継続され、婦好墓をはじめとする墳墓群、戦車や馬を埋納した車馬坑などの遺構と、漢字の祖型と称される甲骨文字が刻まれた亀甲に代表される膨大な遺物が発見された。1987年に遺構整備を開始し、2005年に殷墟博物館を設置、2006年には世界文化遺産に登録された<sup>13)</sup>。殷墟は宮殿区画と王陵区画から構成されており、主要な遺構や殷墟博物館が所在する宮殿と墓域である王陵は無料のシャトルバスで行き来することができる。

殷墟博物館は、殷墟の解説と出土した遺物の保存・展示を目的とした博物館である。展示は、青銅器、玉製品、甲骨文字の順に構成され、常時600点余りの資料が展示されている。殷墟の敷地内には、車馬坑や甲骨の大量埋納坑の出土状態の展示や、墓地埋納状態にガラス天井を設けた密閉式覆屋など、数多くの野外展示がなされている(写真5)。現地ガイドによると、野外展示資料は複製資料(二次資料)であり、遺跡に臨場感を与えるために展示しているとのこ



写真3 兵馬俑坑1号坑



写真4 西安半坡博物館教育普及ポスター



写真5 殷墟博物館の野外展示

とであった。また、オリジナルにあたる一次資料は保存環境の整った博物館で収蔵しており、資料保存と観覧者へのPRを両立させていることが特徴的である。

### 3. 大学博物館

当該地域の大学博物館としては、河北地質大学内に所在する地球科学博物館と錢円金融博物館が挙げられる。

河北地質大学地球科学博物館(The Geoscience Museum)は、河北地質大学の学科教育と研究を推進する河北省では数少ない自然科学系大学博物館である。元々は、大学の前身である宣化地学校時代の1954年に設置され、現在の施設は2006年に開館したものである。

館所蔵資料およそ3万点のうち8千点余りを常設展示しており<sup>14)</sup>、資料は所属教員が長年収集してきた岩石、鉱物、宝石、鉱物、古生物の化石等の標本をコレクションの核としている。博物館の構造は、1階が宇宙の神秘、地球の構造、地球の内外動力効果の展示、2階が各種の火成岩・堆積岩・変成岩、3階が真珠・宝石・玉、鉱物標本、4階が恐竜、5階が古生物の化石の展示であり、恐竜の展示のために4階と5階は吹き抜けの回廊式になっている。また、博物館の野外には象徴展示として恐竜の模型が展示されている。

また同館は、国内外からの視察や海外青年交流団などの受け入れも積極的に行っているほか、

中国国内の小中高の生徒の科学教育の場としても利用されている。

河北地質大学には、地球科学博物館の他に錢円金融博物館も設置されている。錢円金融博物館は、河北地質大学が石家庄経済学院の時代に、錢貨・度量衡・計算機などをテーマとして建設した大学博物館である。同館は、河北地質大学で金融学・会計学・経済管理学・芸術設計学・流通学などを専門とする学生に博物館資料を提供し、学生の学びの場として活用するために設立された<sup>15)</sup>。一方、貴重な資料が多いことから常に開館はされず、見学申請が必要である。

### 4. 美術館

美術館としては、西安碑林博物館、永昌博物館、曲陽石道芸術館を調査した。

西安碑林博物館は、西安城壁に隣接して1993年に設置された、石碑を中心とした美術館である(写真6)。西安碑林の始まりは北宋元祐2(1087)年に遡り、1772年時点で石碑の収集、保存、展示といった博物館としての機能を備えていたことから、中国の博物館の嚆矢であると考える研究者も存在する(張[2018:103-134])。現在では、7ヶ所の展示室、8ヶ所の碑亭、6ヶ所の墓誌廊、石刻芸術室などから構成され、4千点余りの資料を収蔵している<sup>16)</sup>。また西安碑林博物館が所在する地域は、「碑林博物館保全地区」として西安市が指定する町並み保存地域となっている(曹[2007:36-51])。



写真6 西安碑林博物館

西安碑林博物館の展示は、とりわけ貴重あるいは特徴的な資料については、個別の建物を用いて保存・展示しているが、基本的には展示室内に石碑を林立させ、ガラスバリアと簡単なパネルを設けて提示する方法を採っている。各展示室には、テーマごとに石碑を配しており、第一室から第七室にかけての順序で観覧するようになっている。一方、各展示室内には決められた動線は無く、観覧者が各々興味のある石碑を熟覧できるようになっている。

永昌博物館は、袁万衡氏が理事長、王文彦氏が館長を務める民営博物館（日本で言うところの個人あるいは個人の会社で運営する私立博物館）で、2017年に設立された。収蔵資料は、鏡を中心とする青銅器、金銅仏、玉製品、古瓦などがあるほか、秦～清代にかけて製作された銅製の印章を118点収蔵しているのがコレクション上の特徴である（袁 [2019: 238]）。永昌博物館は、博物館の語を用いているが、原則的に美術的価値のある資料を提示し、観覧者に鑑賞させるスタイルを採ることから、日本における美術館に比定できる。

曲陽石道芸術館は、曲陽県に所在する民営博物館で、石刻芸術家の劉金虎氏が自身の作品を展示する美術館である。石家荘市曲陽県は、黄山から産出される良質な「白石」の産地として知られ、漢代に石材加工産業がはじまり、唐代に発展した後、元代に最盛期を迎えた<sup>17)</sup>。現在でも、町中心部では石材加工品の販売、郊外では石材の保管と加工が広く行われており、同県の基幹産業として位置付けられている。

劉氏は、隋、唐、北斉時代に制作された仏像の意匠を基本とし、現在の技術を組み合わせて制作した石造仏を中心に、創作活動を行っている。館は2階建てで、1階には劉氏が白石を用いて制作した各種仏像類、2階には劉氏が収集した仏教関係資料およびそれらを基に劉氏が忠実に複製した二次資料が展示されている。

## 5. 世界湾収蔵博物館集群

世界湾収蔵博物館集群は、複数の博物館から構成される博物館群の総称である。世界湾は、古玩城（骨董商の小店舗が多数入居する施設）として設立され、2014年頃から民営博物館が多く入居するようになり、現在の博物館群の形になったとされている<sup>18)</sup>。

今回は、2017年に開館した3つの博物館を調査した。王会軍氏が設立した河北省金文淵青銅芸術博物館は、館名の如く主たる展示資料は青銅器であり、中でも優秀な銅鏡のコレクションを保有している（写真7）。馮良玉氏が設立した河北省北方雕塑博物館は、北魏時代の仏像を中心とする仏教資料および陶磁器の展示が主体である。牛鉄軍氏が設立した河北省吉古堂家具芸術博物館は、椅子などのインテリア、商店の看板、大工道具類を主に収蔵・展示している。また、子ども向けに建築に関するワークショップを開催するなど、教育普及活動もある程度実践している。

今回調査した3館は、それぞれの博物館が特定のテーマに基づいたテーマ館であり、設立者の興味および審美眼に基づいて収集された各分野の優品が展示されているのが、一貫した特徴である。また、小規模な民営博物館が一つの建物に入居するという構造は、日本では見られない中国独特の博物館運営形態であるといえよう。



写真7 河北省金文淵青銅芸術博物館



### 第3章 陝西省・河北省域の博物館の傾向分析

これまで、陝西省・河北省域の博物館の概要を示したが、見学を進める中で一定の傾向を見出すことができた。また、昨年度調査した甘肅省の博物館との比較対照のため、本章では昨年度と同様に「展示」「多言語対応」「ミュージアムショップ、販売施設」の3つの観点を設定し、当該地域の博物館の傾向分析を試みるものである。

#### 1. 展示

当該地域の博物館展示は、他の中国の博物館の例に漏れず、「優品」を「提示」するスタイルが大半である。中国は、5000年もの長きにわたって繁栄し、中でも本年度調査した3都市は、中国の歴代王朝・国家が都を構えた地としても知られることから、歴史に裏付けられた豊富な文物、中でも考古資料・歴史資料が多く遺存している。豊富な青銅器や玉製品、多彩な陶磁器などがこの代表例である。日本の博物館に多い土器片などの考古資料や農具に代表される民具資料と違って、これらの資料は提示しておくだけでも美しさや特異性、歴史的価値を発信できる優秀な資料である。つまり、モノをわかりやすく伝えるための様々な工夫をしなくても何となく観覧できてしまうのであり、考古資料・歴史資料であっても美術資料と同様に扱われている感が強い。

一方で、西安半坡博物館および河北博物院では、他の資料やわかりやすいイラストとの組み合わせ、欠損部位を樹脂で補填することによるイメージの創出などの説示型展示や（写真8）、銅鏡の触察、原始時代の衣服の着装といった体験型展示、ミュージアムグッズとの比較展示など、特色のある展示を実践し、日本の県立クラスの歴史系博物館と同等の展示の工夫を実践している。

前者は中国初の遺跡博物館として考古学史上重要であるものの、収蔵資料は土器、石器、骨角器など比較的地味な印象を受けるものが多い。世界遺産として全世界的に著名で、美しい資料

を出土する兵馬俑坑や殷墟と比較すると、同様に資料を展示しても観覧者の満足度は高くないと考えられる。同館は、先述の教育普及活動の実践などを含め、博物館の基本姿勢を教育と位置付けているとみられ、展示も教育を意識した構成を採っていると観察される。館内に掲示された写真や、同館訪問時に来館していた人々から判断して、同館は小学生程度の年齢の人が学習目的で来館する傾向にあり、半坡遺跡について小学生でも平易に理解ができるように工夫した結果が同館の展示と考えられる。

後者は、陝西歴史博物館や昨年度調査した甘肅省博物館と同様の省立クラスの博物館であり、国家一級文物（日本における国宝クラス文化財）340点をはじめとする優秀なコレクションを収蔵している。同館は、資料の魅力に依拠した展示を実践できる環境にあるにもかかわらず、上記のような展示の工夫を試みている理由としては、西安半坡博物館と同様に博物館展示に教育的意図を持たせているためと推測できる。先述の通り、河北博物院では数多くの教育普及活動を実施し、博物館教育に力を入れていることが伺える。中国では、近年博物館教育が盛んな傾向にあり、上海科技館などの科学博物館を中心に積極的な教育普及活動が実践されているほか、



写真8 河北博物院の説示型展示

『博物館教育活動研究』『博物館与教育』といった研究書も多数刊行されている。河北博物院は、2013年に南区を新設して展示の現代化を図ったとリーフレットに記載があるが、展示を計画する際に博物館教育が重視されている現状を加味することで、教育的な要素を有する展示になったと推測される。

また、情報メディア機器や映像展示を多用する展示スタイルも他省の例と合致する。中国の博物館展示において、当該分野は日本の博物館をはるかに凌駕していることが、これまでの調査で明らかとなっている。

本年度調査であれば、殆どの博物館が採用している二次元コードを用いたスマートフォンによる解説、陝西歴史博物館や河北博物院で採用されている臨場感の高い大型映像展示、秦始皇帝兵馬俑博物館や河北博物院が採用しているゲーム機能を有する情報 kiosk 端末が代表例である。しかし、博物館が設置された時代がそれほど新しくないせいか、導入されている情報メディア機器や映像展示に特筆するほどのものは無く、メンテナンス等に不具合が見られる館も散見される。例えば、陝西歴史博物館の石器時代のくらしに関する映像展示は、映像を投影する背景に住居や地形を描き、そこに人間や生活道具、背景と同じ地形や住居の映像を映し出すというものだが、背景に合致させるべき映像の投影位置がずれており、画像が二重に見えて観覧しづらい状況となっている(写真9)。他にも、壊れたまま放置されている映像機器も散見されており、映像展示環境の改善・向上が今後の課題といえる。

一方、今回訪問した民営博物館では、二次元コードを除く情報メディア機器や映像展示を採用している館は見受けられなかった。これは、①民営博物館は設立者の興味および審美眼に基づいて収集された各分野の優品を展示するもので、資料を用いた教育を目的とした展示でないこと、②情報メディア機器や映像展示は導入のために高額な費用がかかるうえに、常に使用さ



写真9 陝西歴史博物館の映像展示  
(下の図と映像がずれている)

れ続けるため損耗も激しく、また機器の進歩は日進月歩であることから、費用対効果の面で導入を考慮しないといった考えに基づくものと推察される。

## 2. 多言語対応

中国の博物館における多言語対応は、概ね母国語である中国語と英語の二ヶ国語表記が多い点を前稿で指摘した(落合・中島[2019:99-110])。この傾向は、積極的な英語教育の実施、コミュニケーション手段としての英語の使用、国家レベルでの対外的博物館方策の推進に基づいたものであり、筆者がかつて訪問した上海市、浙江省、甘肅省、および本年度調査した陝西省、河南省、河北省の博物館の殆どで二ヶ国語表記が浸透していた。

本年度調査で注目したいのは、英語以外の言語対応である。今回調査した博物館では、中・英表記に加え、日本語、韓国語を併記している館が複数存在し、筆者は日本人であるので、日本語表記を重点的に確認した。

今回の調査地域のうち、西安市と安陽市の施設では各所で日本語表記が見られた。例えば、西安市内の西安博物院や西安碑林博物館、西安半坡博物館では、施設の概要説明や案内標識に日本語が併記されている。安陽市の殷墟では、案内標識に日本語が使用されているほか、日本語ができる中国人ガイドを配置している。河北

省の博物館では、日本語表記は見られなかったが、河北博物院には日本語の電子音声ガイドが存在していた。なお、日本語音声ガイドは、西安博物院や陝西歴史博物館などでも採用されており、特に後者は音声に加えて日本語の字幕表示が流れるものを使用している。

しかし、使用されている日本語の精度があまり高くないことが、どの館も共通している。例えば、西安碑林博物館の解説パネルは中英日韓の4ヶ国語表記であるが、中国語と英語は時代表記に加えて資料の解説が複数行にわたって記されているものの、日本語・韓国語は時代表記のみであり解説は無い(写真10)。また、殷墟の案内標識に「水深5米岸陡清游客注意安全」と中国語で書かれた部分があるが、日本語の案内は「水深5メートルの水の深さ」のみであり、水深が深いため気を付けるようにといった意味合いが表現されていない。このように、最低限日本語を併記したのみ、あるいは表記があっても翻訳ソフトの訳をそのまま使用したかのような記述が多く、日本語表記が重要視されていない現状が理解できる。

また、西安観光で観光客が多く訪れる秦始皇帝兵馬俑博物館や西安城壁、日本人が訪問することの多い空海ゆかりの青龍寺には、英語以外の外国語表記が確認できなかった。確かに現在は、通訳機器や翻訳アプリが発達し、無料あるいは比較的安価に利用することができる。Wi-Fi環境も整備され、インターネット経由で母国

語の解説を取得することも可能である。

しかし、だからといって外国人対応をなおざりにして良いわけではない。張海燕は「西安における都市観光の現状と課題—文化遺産の保存と活用を中心に—」の中で、年間121万人以上を超えるインバウンドのうち、1月～9月の間に韓国9万3千人強、日本3万6千人強の観光客を受け入れている現状を指摘している(張[2019:87-112])。アメリカ(9万9千人強)、オーストラリア(3万1千人強)といった英語圏からの観光客約19万人と比較しても、日韓からの観光客数は決して少なくない。また、インバウンド観光客の中には、上記機器やアプリ等を活用できない人も多数存在する。特に西安市や殷墟を有する安陽市は、観光資源の特質上、上海などと比較して「歴史」や「文化遺産」といった要素を目的に訪問する率が高いと考えられ、その中には機器やアプリ等を活用できない高齢の観光客も多く含まれるであろう。そのような人々への対応を含め、多言語対応について再検討していくことが、今後当該地域の博物館に求められると筆者は考える。

### 3. ミュージアムショップ、販売施設

本調査で訪問した博物館の中では、17館中12館もの博物館が何らかの販売施設を有し、販売施設の規模、販売しているグッズの質ともに昨年度調査した甘粛省下の博物館を凌駕する内容であった。また、当該地域のミュージアムショップの中でも特色のあるショップが複数種存在していた。

例えば西安碑林博物館は、先述の如く古くから伝えられてきた石碑の保存・公開を行う博物館であるが、同館の特徴として石碑からその場で拓本を採って販売するというものがある。中国では、書家の名筆や碑文を拓本に採って研究だけでなく贈答品として活用するなど、現在でも拓本が珍重されている。西安碑林博物館の採拓および販売の仕組みは、拓本を珍重する中国の歴史的な背景に基づいたものであり、また一



写真10 西安碑林博物館の解説パネル

方で、採拓風景をパフォーマンスとして観覧者に見せるといった意味も垣間見ることができる(写真11)。

今回訪問した中で特殊なものとしては、青龍寺陳列室に併置されたショップが挙げられる。同店は、青龍寺陳列室の隣に一室を設けて営業しているもので、店内には青龍寺に関する書籍、経典、朱印帳などが販売され、菅直人元首相が訪問した際の写真などが掲示されていた。しかし、普段は扉が閉ざされており、今回青龍寺陳列室を訪問した際に、偶然日本語が堪能な店員と遭遇したことで店舗の存在を把握したのである。店員の話では、同店は青龍寺を訪れた日本人のみに開店するとのことであり<sup>19)</sup>、中国人のみの来店は受け入れていないことが最大の特徴と言える。これは、青龍寺が空海を通じて日本との関係が強く、四国を中心として現在においても団体訪問があることから、その観光客向けに設置されたミュージアムショップであると考えられる。例えば、日本に大型クルーズ船で来港する中国人観光客が、地元の飲食店や土産物店には行かずに旅行会社と提携した中国人向けの特定の店舗(免税店)に誘導されて買い物をするという実態があるが、青龍寺のミュージアムショップはその日本人向けの例であるといえよう。つまり、青龍寺を訪れた団体旅行者をショップに誘導し、土産を買ってもらうことを目的としたものが同店であると考察する。

これ以外にも、大規模博物館におけるミュー

ジウムショップを複数設置する事例や、自動販売機を用いてミュージアムグッズを販売する例など(写真12)、日本の博物館ではあまり見られない特徴的なショップ展開を行っていることが特徴として挙げられる。

当該地域のミュージアムショップは、総じて本来の目的である「博物館の展示や教育活動の延長として教育効果を高める」ことが意図されている傾向にある。加えて、松永久が述べた「ミュージアムショップ充実の度合いは来館者の最終的な満足度を決める重要な要素である」といった考えに対し(松永 [2005: 50-54])、当該地域の店舗では十分に満足し得るグッズ展開がなされていたことが特徴である。昨年度調査した甘粛省下の博物館の中では、甘粛省博物館以外に明確なミュージアムショップが設けられていない状況を明らかにしたが(落合・中島 [2019: 99-110])、本年度調査では店舗を設けている殆どの館がオリジナリティに富んだショップとして運営されていた。これは、①当該地域には中国政府が指定する国家一級博物館が多々存在し<sup>20)</sup>、あらゆる面で他の博物館を牽引する立場であることから、グッズ等にも力を入れていること、②西安や安陽(殷墟)は全世界的に著名な観光地であり、また石家荘市も北京・天津から近く世界遺産も複数擁する地域であることから、当該地域を訪れる人々への土産の意義を有することが、その要因として考えられる。



写真11 西安碑林博物館の採拓風景



写真12 自販機型ミュージアムショップ  
(秦始皇帝兵馬俑博物館)

## おわりに

本研究は、中国西北域の博物館、世界遺産、歴史的建造物等の調査から、博物館の観光活用と観光に対する意識の把握を目的としたもので、本稿は陝西省・河南省・河北省下における観光資源としての博物館・文化遺産の現状把握を行い、昨年度調査した甘肅省下の事例と照合・検討を行った。調査の結果、展示に関しては共通点が多く見られ、多言語対応においても導入施設の多少はあれども不十分な現状にあることを把握した。特に後者は、上海など都市部の博物館においても整備が不十分であり、全国的に対策が必要であろう。中国博物館条例の第34条には、「博物館は、(中略)コミュニティ文化建設及び対外文化交流・協力に参画しなければならない。(傍線筆者)」とあり(岡村 [2015:134])、今後のインバウンドを見据えた多言語化が進展していくことを期待したい。一方、ミュージアムショップに関しては、歴史的環境および文化的な背景に基づき、甘肅省と比較して充実している現状を把握した。本研究で訪問した地域はごくわずかであり、今後は近似の性質を持つ地域を調査することで、比較検討を行いたいと考えている。

本研究は、平成30年度～令和元年度国際観光学科共同研究費を使用して実施した。研究期間は2019年度をもって満了となるが、次年度以降も研究は継続して実施し、中国域の博物館とその観光活用について解明していきたい。また、当該地域に所在する世界遺産の運営と観光活用については、紙幅の関係上述することができなかった。2ヶ年の間に訪問した秦始皇帝陵と兵馬俑坑、大雁塔、小雁塔、麦積山、殷墟および敦煌のサテライト施設である敦煌芸術館については、他省の事例を勘案したうえで再検討したいと考えている。

## 注

- 1) 西安市文物局 HP「文宝単位」(文化遺産): [http://xawwj.xa.gov.cn/ptl/def/def/index\\_1270](http://xawwj.xa.gov.cn/ptl/def/def/index_1270)

\_4698\_ci\_recid\_3710499.html (2019年10月29日閲覧)

- 2) 中国観光局大阪駐在事務所 HP「河南省」: <http://www.cnta-osaka.jp/city/henan> (2019年10月29日閲覧)
- 3) 陝西歴史博物館解説パネルより意識
- 4) 西安博物院リーフレットより意識
- 5) 小雁塔解説パネルより意識
- 6) 河北博物院市民講座リーフレットより意識
- 7) 河北博物院的劉塔院長への聞き取り調査より
- 8) 青龍寺解説パネルより意識
- 9) 青龍寺遺址博物館の職員への聞き取り調査より
- 10) 秦始皇帝兵馬俑博物館解説パネルおよびチケットより意識
- 11) 西安半坡博物館解説パネルより意識
- 12) 西安半坡博物館教育普及活動紹介パネルより意識
- 13) 殷墟リーフレットおよび殷墟日本語ガイドの解説より
- 14) 河北地質大学地球科学博物館リーフレットより意識
- 15) 河北地質大学の張館長への聞き取り調査より
- 16) 西安碑林博物館解説パネルより意識
- 17) 曲陽石道芸術館リーフレットより意識
- 18) 河北省金文淵青銅芸術博物館の王会軍館長への聞き取り調査より
- 19) 青龍寺陳列室ミュージアムショップの店員への聞き取り調査より
- 20) 当該地域の国家一級博物館のうち、本年度調査したのは、西安市の陝西歴史博物館、秦始皇帝兵馬俑博物館、西安碑林博物館、西安半坡博物館、石家荘市の河北博物院であり、特に西安市には国家一級博物館が集中している。(百度百科「国家一级博物馆」: <https://baike.baidu.com/item/%E5%9B%BD%E5%AE%B6%E4%B8%80%E7%BA%A7%E5%8D%9A%E7%89%A9%E9%A6%86> (2019年11月8日閲覧))

## 参考・引用文献

- 袁 万衡 (2019)『永昌博物館藏古璽印選』河南美術出版社。
- 岡村志嘉子 (2015)「中国の博物館条例」『外国の立法』264, 国立国会図書館調査及び立法考査局。
- 落合知子, 中島金太郎 (2019)「陝西省・甘肅省・ウイグル自治区の観光における博物館活用の研究—中国甘肅省における博物館の現状と観光活用—」

- 『長崎国際大学論叢』第19巻, 長崎国際大学, 99-110頁.
- 杉本憲司 (2015)「中国の博物館・美術館訪問記(上)」『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』第11号, 佛教大学宗教文化ミュージアム, 27-40頁.
- 曹 婷 (2007)「西安市における歴史的町並み保全とその課題—書院門街, 北院門街, 徳福巷を事例として—」『人文地理』第59巻第5号, 人文地理学会, 36-51頁.
- 張 海燕 (2019)「西安における都市観光の現状と課題—文化遺産の保存と活用を中心に—」『名城大学論叢』第19巻第4号, 名城大学, 87-112頁.
- 地球の歩き方編集室 (2017)『地球の歩き方ガイドブック 西安・敦煌・ウルムチ シルクロードと中

- 国西北部 2018年~2019年版』ダイヤモンド社.
- 地球の歩き方編集室 (2018)『地球の歩き方ガイドブック 中国 2019年~2020年版』ダイヤモンド社.
- 中国駐大阪観光代表処編 (2018)『中国の世界遺産』中国駐大阪観光代表処, 5, 24, 30頁.
- 松永 久 (2005)「21世紀のミュージアムショップ」『博物館学雑誌』第30巻第2号, 全日本博物館学会, 50-54頁.

#### 執筆分担

- 落合知子: 要旨, はじめに, 第1章, 第2章2  
中島金太郎: 第2章1, 3~6, 第3章, おわりに